JANAMEF
Japan-North America Medical Exchange Foundation
news

Vol. 45
2016.2

■発行年月日／平成28年2月20日
■編集／事務局
■発行／公益財団法人日米医学医療交流財団
〒113-0033 東京都文京区本郷3-27-12-6F
TEL: 03-6801-9777 FAX: 03-6801-9778
E-mail：info@janamef.jp
URL：http://www.janamef.jp

巻頭 Essay

新しい医療事故報告制度に望む

公益財団法人日米医学医療交流財団理事／三井記念病院院長
高本眞一（たかもとしんいち）

平成27年10月から新たに医療事故報告制度が稼働し始め、「当該病院等に勤務する医療従事者が提供した医療に起因し、又は起因すると疑われる死亡又は死産であって、当該管理者が当該死亡または死産を予期しなかったもの」を医療事故として管理者が医療事故調査・支援センター（以下、センター）に報告することになった。この制度は医療事故の原因の究明と再発防止のために外部委員を含んだ院内調査委員会にて調査分析を行い、それを遺族と病院側に報告するものである。この制度は本邦で初めて医療事故報告制度が法制化された点で、大いに評価したいが、いくつかの問題点は残っている。

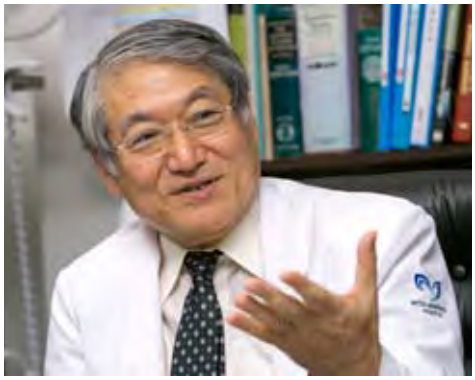
遺族への説明は口頭もしくは書面もしくはその双方の適切な方法により行うということになっている。これに関しては厚生労働省（以下、厚労省）検討会での議論で「個人の責任追及」への懸念から、上記のような表現になったというが、医療は患者のためになされるものであり、一方的に医療側からだけが責任追及を逃れたいということは医療の本質から離れると見なされる可能性がある。書面での報告でモデル事業でも問題はほとんどなかった。

平成28年の6月にこの法律が見直されるということであるが、一番大きな問題はこの15年来問題となっていた「医師法21条に対する対応」が今回の法律では何も決まっていないことであろう。医師法21条のルーツは明治時代に遡り、「医師は、死体又は妊娠4月以上の死産児を検案して異状があると認めたときは、24時間以内に所轄警察署に届け出なければならない。」となっており、医療、公衆衛生と殺人のような刑法犯罪を一緒に扱うところに矛盾があり、大野病院事件のように医療界においても無謀で、警察においても恥辱となる事件を起こしている。

厚労省検討会ではこの制度を一切警察との関わりを無くするという観点から、医師法21条についても放置のまま議論が終わっており、新しい医療事故報告制度が成立しても医師法21条の束縛は依然と存在し、警察権力によりいつ我々は刑罰に問われるかも分からない不安定な状態は続いている。医療事故の際に医療機関の管理者はセンターに届けると同時に警察にも届け出なければならないかと常に心配しなければならない状態である。

2007年に立ち上げられた第一次の厚労省検討会では私も委員の一人であったが、警察庁幹部と「重大な医療過誤」のみを医療側が判断して警察に届出をすれば、医師法21条について警察への届け出は無くてよいという所までは合意ができていた。

医療事故の中で故意、改竄（かいざん）あるいは犯罪としてもよいぐらいな重大な過失などは医療側から警察に届けるべきと考える。それを放置することは犯罪を隠匿（いんとく）することでもあり、患者に寄り添った医療とはなり得ない。そのようにすれば、医療側も通常の医療において刑事処罰の心配なしに、センターへの届け出だけで、安心して医療を続けることができる。



医療事故調査委員会も再発防止策の中に、施設のシステムエラーの改善、事故医師の能力アップのための教育的処置などを積極的に加えるべきと考える。今後この制度が患者中心の医療をさらに推し進め、同じような事故を防止するとともに、より質の高い良い医療が広く行き渡るように改善の端緒となることを望んでいる。

高本眞一氏　主な略歴：
1947（昭和22）年生まれ。愛媛県松山市に育つ。三井記念病院院長。東京大学医学部名誉教授。外科医（専門は心臓血管外科）。
1973（昭和48）年東京大学医学部医学科卒業。1978（昭和53）年から80年ハーバード大学医学部マサチュセッツ総合病院外科研究員としてつとめる。埼玉医科大学第一外科講師、公立昭和病院心臓血管外科主任医長、国立循環器病研究センター第二部長を経て、1997年に東京大学医学部胸部外科教授に就任。2009年より現職。2015年より公益財団法人日米医学医療交流財団理事。
著書：『Annual Review循環器〈2010〉』（共編、中外医学社、2010年）、『冠動脈外科の要点と盲点（心臓外科Knack&Pitfalls）〈第2版〉』（坂田隆造編集、文光堂、2012年）、「大動脈弁輪拡張症に対するDavid-V法（UT modification）」『わが国で生まれた心臓血管外科手術』（川副浩平／Developing the Academic Surgeo編集、メジカルビュー社、2013年）、『患者さんに伝えたい医師の本心』（新潮新書、2015年）等
学会役職等：アジア心臓血管学会理事長（2015年）、日本心臓血管外科学会理事長（2006年）、日本胸部外科学会第59回会長（2006年）、日本心臓病学会第56回会長・理事（2008年）、日本循環器学会理事（2008年）、ヨーロッパ心臓胸部外科学会理事（2009年）、アメリカ胸部外科医会理事（2012年）等

新年を迎えて

日本‘良さ’で世界に平和的貢献をする

公益財団法人日米医学医療交流財団理事長
名古屋大学大学院医学系研究科
総合医学専攻総合診療医学分野教授
伴　信太郎

近年、外務省は『国際保健を日本外交の重要課題と位置付け、日本の知見等を総動員し、全ての人が基礎的保健医療サービスを受けられるようにすることを目指す。』としています。

2015年12月16日に開催された国際会議‘International Conference on Universal Health Coverage in the New Development Era: Toward Building Resilient and Sustainable Health Systems’で、安倍首相は次のように述べました。

‘（一部を抜粋）Japan has long contributed to global health challenges by mobilizing expertise, taking actions and producing tangible results. The reason why Japan prioritizes health comes from our conviction that it is among the most important elements in the concept of human security, which strives for the protection and empowerment of all individuals, and the fulfillment of their potential.’

今ヘルスケアは外交政策の重要な柱の一つになっています。しかし、これらの外交政策が地に足の着いたものになるためには、現場の医療職の参加が不可欠です。

ヘルスケア分野での世界貢献はJICA（Japan International Cooperation Agency）が中心となって展開されてきましたが、大学教育に参画するようになったあるJICA職員は「医学界での英語教育の遅れに大変衝撃を受けた」と語っていました。これまでの日本の医学部（医学科・保健学科等の関連学科を含め）では、英語教育のみならず、多様な人材を国際舞台に送り出せるような教育は行われてきませんでした。これは国際舞台で活躍する日本人の数をみても明らかで、WHO等の国連機関における日本人の充足率は、想定される基準人員の3分の1程度だと言われています。

『灯台下暗し』で、日本には、実は世界で通用する様々なヒト・伝統・制度・取り組みがあります。例えば「地域包括ケアシステム」です。一般住民を巻き込んで、行政や民間の保健・医療・福祉・介護・生活支援専門職が緊密に連携をした「ヒトの絆」を実現している地域は決して稀ではありません。このような「絆」は‘transprofessional education’と呼ばれる人材育成で可能となりますが、これは世界的にも注目されている人創りです。

日本の持つこのようなノウハウを世界に発信するためには、国際舞台に出て、日本の立ち位置を実感することが第一歩です。そして、情報はインターネットでいつでも、だれでも、どこでも手に入る今日、face to faceで海外の人達と語り合えるような機会が重要です。当財団は「日米医学医療交流財団」とはなっていますが、目指すところは全世界を視野に入れた国際交流（international exchange）です。このような企画をいろいろ考えてゆきたいと思います。

もう一つ日本が世界から注目されているのは、2011年3月11日の東日本大震災の経験とそこからの復興ですが、この過程を可能ならしめたのも「ヒトの絆」です。高度先端医学・医療のみならず、「ヒトの絆」からなるヘルスケア活動も世界に発信していくべきである！　新年に、そんなことを考えていました。

【参考文献】

Frenk J, et.al. Lancet 2010; 376 (9756): 1923-1958.

伴　信太郎（ばん・のぶたろう）

1979年京都府立医科大学卒業。1980～83年米国クレイトン大学家庭医学科レジデント。国立長崎中央病院、川崎医科大学を経て、1998年より名古屋大学医学部附属病院総合診療部教授。2011年より現職。日本医学教育学会理事長。
日米医学医療交流財団では、2009～11年常務理事、2011～12年と公益財団移行後2013年まで専務理事。2013年より理事長。

2015年度 JANAMEFフェロー決定

Scholarship

A項－留学助成

加藤　壯
東京大学医学部卒、東京大学医学部附属病院整形外科
研修先／分野 Toronto Western Hospital（Clinical Fellow）
脊椎外科

紙谷　聡
富山大学医学部卒、在沖縄米国海軍病院
研修先／分野 Children's Hospital Colorado, University of Colorado（Resident）
小児感染症分野、ワクチン

日下部　治郎
京都大学医学部卒、大阪府医真会八尾総合病院消化器外科
研修先／分野 Barnes-Jewish Hospital, Washington University School of Medicine（Resident）
肝胆膵外科、移植外科、内視鏡外科

平松　総一郎
東海大学医学部卒、横須賀米海軍病院
研修先／分野 Harvard T.H. Chan School of Public Health（MPH）
公衆衛生

船本　成輝
京都大学医学部卒、京都大学大学院医学研究科心臓血管外科
研修先／分野 Massachusetts General Hospital（Clinical Fellow）
心臓外科

盛　直博
弘前大学医学部卒、昭和大学病院麻酔科
研修先／分野 Massachusetts General Hospital（Research Fellow）
麻酔科学

医学部夏期集中医学英語研修助成者

有元　玲奈
防衛医科大学校5年

甲斐　日向太
京都大学医学部5年

倉持　菜々美
千葉大学医学部5年

住吉　啓伸
広島大学医学部6年

田口　梓
筑波大学医学群医学類5年

玉井　夢果
山形大学医学部5年

内藤　恵里
日本医科大学医学部5年

中村　はるか
慶應義塾大学医学部5年

矢野　由希子
慶應義塾大学医学部5年

アメリカ短期看護研修助成者

五十嵐　良恵
東京共済病院

市川　瑞希
滋賀医科大学附属病院

鵜川　美穂
湘南鎌倉総合病院

岸　なつみ
仙台市立病院

小林　千乃
御代田中央記念病院

長谷川　恵美
草津ハートセンター

藤澤　典子
松原徳洲会病院

光野　清美
鎌ケ谷総合病院

依田　かおり
鹿児島赤十字病院

（注）50音順・敬称略

JANAMEFフェローレポート

Bringing the Future of Healthcare from Hawaii!

2015年医学部夏期集中医学英語研修プログラム研修報告

本プログラムは、医学英語（medical english）やケースプレゼンテーション（case presentaion）を集中的に上達させるとともに、グローバルな視野を広げる機会を提供し、臨床留学や海外実習参加に必要な能力の育成を目的としています。財団の助成者からの研修報告を掲載します。（全文については、http://www.janamef.jp/fellow/をご覧ください。）

研修期間：2015年8月17日（月）～22日（土）（6日間）　主催：Hawaii Tokai International College（HTIC）
研修場所：Hawaii Tokai International College（HTIC）　協力：神戸大学医学部、東海大学医学部

JANAMEF Fellow report

とにかく英語を使うこと

有元 玲奈（防衛医科大学校5年）

この研修プログラムの最も大事な課題は「とにかく英語を使うこと」で、medical ethicsに関するディスカッションに加え、history takingからdifferential diagnosis, case presentaionまでを毎日英語で行いました。自信のない英語でも毎日使わなければならない状況になると、少しずつ自分の殻を破ることができるようになり、英語を話すことへの抵抗が日に日に小さくなったように感じます。これは私にとって本当に大きな収穫で、これからの研鑽の第一歩になったと強く確信しています。

日本に戻ってから、改めて夢のような6日間だったなと振り返っています。しかし、これからが本番だと思います。

アメリカの医療を知る

甲斐 日向太（京都大学医学部5年）

ハワイで働かれているドクター（主に教育活動をメインにされているMDの方が多かった印象です）から様々なレクチャーを受けました。アメリカの医療について、プライマリーケアについて、オバマ政策について、アメリカ特有の疾患や合併症の考察について、どのような研修がハワイで行われているのかといった、バラエティーに富む内容でした。

ワイキキで開業されている、Dr. KobayashiのSt. Luke's Clinicを訪れた時には、そこで形成される日本人のコミュニティの強さに感動しました。ハワイに住んでいる方々は、ハワイのたくさんの人種が混在し、協力しあっている地域、これこそが未来の世界だと仰る方が多く、アメリカの本土とはまた違う文化の片鱗を見たような気がしました。

まさに目から鱗

倉持 菜々美（千葉大学医学部5年）

始めに、Medical Englishの授業で、問診、case presentationの型、というものを教わり、暗記するように言われました。こうしたフォーマットはアメリカの医者、医学生の間では常識であるそうです。私自身今まで英語で問診やpresentationする機会は全くなく、そのよ

うなフォーマットももちろん知らなかったので、まさに目から鱗でした。次に、ハワイ大学医学部で行われる、Clinic Practiceの授業で、覚えた型を実践形式で使う練習をしました。ハワイ大学の医学生たちを模擬患者とした、この実践形式のワークショップは、英語の練習になるばかりでなく、フォーマットをより定着させ、実際に使えるのだという自信につながりました。

実力の向上を実感

住吉 啓伸（広島大学医学部6年）

Medical Ethicsでは、自分の医療倫理に対する考えを英語で述べることで英会話能力を向上できただけでなく、他大学の学生の意見も聞くことで、自分の見識が広がりました。

Medical Englishは、JABSOM（John A. Burns School of Medicine）の学生とのClinic Practiceとリンクした内容を学習することができて、英語でのcase presentationに自信がつきました。

Special Lectureではハワイで医師として働かれている日本人の先生方の話を聞くことができて勉強になるとともに、この研修をきっかけとした繋がりもできました。

JABSOMの医学生とのClinic Practiceは最も実力の向上を実感した研修です。全体を通して、本当に素晴らしい経験ができたと思います。

帰国後も勉強を続けることで効果を最大化

田口 梓（筑波大学医学群医学類5年）

本プログラムは6日間という短期集中プログラムであり、学術的に成長するというよりは、お互いに、また現地の方々から刺激を受け、帰国後も勉強を続けることで、その効果を最大にするものと感じました。実際、本プログラムで非常に医学英語の学習が進んでいる学生にお会いし、参考になったとともに、モチベーションも高まりました。また現地で研修を行う筑波大学出身の日本人医師にもお会いすることができ、非常に勇気づけられました。

「問う」ことに関して学ぶ

玉井 夢果（山形大学医学部 5年）

1週間経て最も重要だと感じたことは、問いかけの能力です。プログラムのすべての場面で、「問う」ことに関して学ぶ余地が大きかったと感じています。

まず医療面接では、質問のテクニックを学びました。一般的なOPQRSTも、患者との英語のやり取りの中で聞き出そうとすると、非常に苦戦しました。質問の仕方に関しても、違法な薬物について、性についてなど、婉曲すぎず自然な言い回しを講師の先生方やハワイ大学の学生からアドバイスいただきました。また、患者に不明な点を問い返すことがいかに重要であるかを知ったのは、大きな収穫でした。

医療倫理のディスカッションでは、発言が乏しく議論がなかなか進まない場面が多くありました。しかしそういった中で、論点を明確にし、他の参加者に意見を問うことでディスカッションを前進させてくれた参加者がいました。きらりと光る「問う」力だったと思います。

志を同じくする仲間との出会い

内藤 恵里（日本医科大学医学部5年）

今回の研修では刺激的なプログラムがたくさんありましたが、一番貴重だったと思うのは、多くの優秀な先生方及び学生と交流できたことです。先生方には大変助けとなるお話を伺えましたし、色々な大学から参加した日本人医学生と1週間充実した時間をともに過ごせたことは宝物です。志を同じくする仲間と合間の時間に遊んだり、将来の夢を語り合ったりしたことは忘れません。また、JABSOMの学生とも問診の合間にお話できました

が、彼らの優秀さに驚く一方で、気さくな彼らと楽しくおしゃべりができて楽しかったです。

英語でのoutputで成長を感じる

中村 はるか（慶應義塾大学医学部 5年）

このプログラムで一番充実していたと感じるプログラムは、患者に扮したハワイ大学の学生に対して一対一で問診をとり、英語でcase presentationを行うというものでした。はじめは言葉がスムーズに出てこず、苦労しました。しかし、最後には自分なりの英語での問診の型を見つけることもできました。英語でのoutputで成長を感じることは、普段の日本での病院実習では得難いものです。今後につながる素晴らしい経験でした。

プログラムが終わって一番強く感じたのは、自分が普段いかに狭い世界で過ごしているか、そして医学英語も医学知識も自分の大学に帰ってもっと必死になって頑張らなければならないというものでした。優秀な他の参加者の存在があってこそ、このような今後につながる影響を受けることができたと思います。

視野が広がり考えを深める

矢野 由希子（慶應義塾大学医学部 5年）

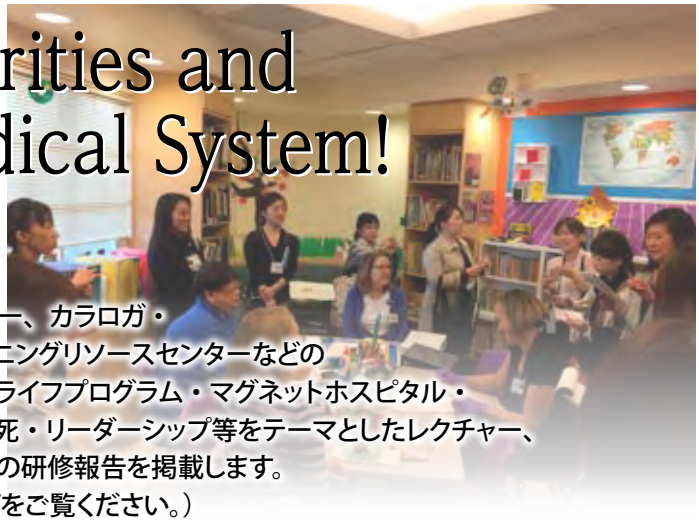
アメリカでは問診とcase presentationが特に重要視されると伺いましたが、それをここまで恵まれた条件で練習できる環境はなかなかないと思います。指導教官の先生が毎回presentationのたびに的確なフィードバックをくださるので、回数を重ねるごとに疾患を特定するのに必要な時間も短縮され、自分でも成長を実感することができました。Medical Ethicsでは各回1つケースをあげて英語で討論をしたのですが、方向性は似ている意見でも自分では気づかなかった側面が見つかったり、また反対の意見でも納得のできる主張があったり、視野が広がり考えを深めることに繋がりました。

プログラムの主な内容

- **Medical English Classes**
  Dr. Doric Little先生からcase presentationとは何かを学ぶ。
- **Medical Ethics Classes**
  「医療倫理」について、グループごとに英語で討論を重ね、最終日にプレゼンテーションを行う。
- **Clinic Practice**
  日本人学生2～3名が1組となりローテーションを組んで、1名のハワイ大学医学部生を問診。
- **Evening Classes**
  医学知識を要する臨床例を英語で討論。
- **Resident Workshop**
  ハワイで活躍する日本人レジデントから体験談を直接聞く絶好のチャンス。
- **Visit to American Medical Facilities**
  医療機関を見学し、アメリカと日本の医療システムの違いを肌で感じる。

JANAMEFフェローレポート

Explore the Similarities and Differences in Medical System!



第12回アメリカ短期看護研修報告

現地では、OHSU附属ドーンベッカー小児病院、プロヴィンス・セントヴィンセント・メディカルセンター、カラロガ・テラス高齢者施設、ポートランド大学看護学部ラーニングリソースセンターなどの視察や、アメリカのヘルスケアシステム・チャイルドライフプログラム・マグネットホスピタル・看護教育コーディネーターの役割・オレゴン州尊厳死・リーダーシップ等をテーマとしたレクチャー、ディスカッションに参加しました。財団の助成者からの研修報告を掲載します。
（全文については、http://www.janamef.jp/fellow/をご覧ください。）

研修期間：2015年10月11日（日）～ 17日（土）（7日間）　企画協力：トータルヘルス教育ネットワーク
研 修 地：米国オレゴン州ポートランド市　現地受入機関：Portland State University（PSU）
後　　援：公益財団法人日米医学医療交流財団

JANAMEF Fellow report

専門職としての責務

五十嵐 良恵（東京共済病院）

看護師のレベルの違いも大きかった。大学で学生が行っているシミュレーション学習には、小児から成人まで様々な状況設定のもと、臨場感あふれる学習をしていた。手先の看護技術だけでなく、自分でその状況から考えてどう行動するか、患者だけでなく家族への声かけまで、具体的に学んでいた。看護師になってからは、専門職としての責務である自己研鑽を自主的に行いながら、プライベートと仕事の区別がしっかりしており、日本の現状との違いが大きかった。また、病院内の看護業務の分業化と機械化が進んでおり、看護師が疲弊しないで看護に専念できる現場であること、夜勤も日勤とほぼ変わらない看護師の人数、本人のライフスタイルに合わせたシフトを選択できること、長期休暇が取れることなど、とてもうらやましく夢のような職場と感じた。

様々なアメリカの現状を知ることができ、日本との違いや見習わなければいけない部分を自分なりに考えることができた。今回学んだことを生かして実践につなげていきたい。

リーダーシップについて考える

市川 瑞希（滋賀医科大学附属病院）

とても印象に残ったリーダーシップに関して報告します。今回のリーダーシップ研修の冒頭で「誰かに何らかの影響を及ぼす可能性を持っている人、その役割を担っている人はみんながリーダー」というお話に心を打たれました。私の中でのリーダーという存在はある組織の上にいる存在で上から下に指示を出すものだと考えていました。しかし今回の研修ではリーダーとはビジョンや指示を押し付けるのではなく、人を惹きつけて一緒に目標に向かって進みたいと思わせる影響力を発揮する存在だと学びました。

アメリカで出会った方はみんな、看護師という仕事にプライドと責任を持ち、とても楽しく仕事をされているように感じます。私自身、患者やその家族、その他の医療スタッフとともに仕事に携わる中で、看護師の仕事により一層プライドと責任をもって勤めていきたいと、今回の研修を通じて考え方が変わりました。

マグネットホスピタルを学ぶ

鵜川 美穂（湘南鎌倉総合病院）

マグネットホスピタル認証を取得した病院では、看護の質が高く求められていた。マグネットホスピタルとは、「磁石のように看護師を引きつける病院」に関する共通の特性を備えた病院に対し、「マグネットホスピタル」という称号が与えられる認定制度である。

認証を受けている病院では、看護師在職率や在職意識の向上、患者安全面、看護の質、病院管理などさまざまな改善がなされていた。各病棟には、マグネットリーダーという役割のみをこなす看護師が配置されていた。各部署での質改善に特化した業務のみを実施しており、マグネットホスピタルに対し、誇りと自信にあふれスタッフの教育・指導にあたっていた。

現地で働く日本人看護師による、アメリカと日本の看

JANAMEFフェローレポート

護教育や臨床での看護体験談についての説明もあり、アメリカと日本の看護について、より深く理解することもできた。

看護教育のレベルの高さ

岸 なつみ（仙台市立病院）

日米の違いで私が特に驚いたことは、看護教育のレベルの高さです。一般的な解剖生理や病態などの知識だけを看護学校で学ぶのではなく、シミュレーションロボというものを教材として使用することで実際の現場で起こりうる事態を考えることができ、現場でのアセスメント力・実践力を看護学生の段階で身につけることができます。これは個人的な意見ですが、アメリカの看護学生が看護学校を卒業する時点で日本の看護師の3年目ぐらいのレベルに相当するのではないかと思われます。それくらい看護学校で教える看護教育のレベルが高いのです。

また看護師として実際に現場で働くようになってからも、2年ごとに免許の更新をしなくてはならないし、大学に入り直して修士号や博士号を取得する人がほとんどであったりと、アメリカの看護師は知識の維持・向上に極めて意識が高いことに非常に驚きました。

今回の研修から、患者さんの命を預かる以上、医療人として日々勉強し続けていくことは絶対的なことであるというのを気付かせていただくことができました。

高い専門性と誇り

小林 千乃（御代田中央記念病院）

研修を通して強く感じたのは米国の看護師が深く専門性を突き詰めているということでした。米国では2年に1回看護師免許の更新があり新しい知識や技術を自ら学ぶ必要があります。また看護師であっても上級資格を習得することで処方や麻酔、骨髄穿刺などを実施できるということも日本との大きな違いでした。アメリカでは修士号・博士号などを習得して医療に従事する看護師が増えてもいるとのことでした。高い専門性と誇りをもって職業に従事することがよりよい看護につながっていると感じました。

今回の研修でもうひとつ得た大きなものとして同行した日本人看護師の皆さんとの交流があります。全国から参加された職位や経験も異なる13名と学ぶことができました。講義の中で質問を募ると次々に手が挙がるその積極性が素晴らしく、とてもよい刺激を受けました。年齢が近く同じく英語に興味があるメンバーと出会えたことも一生の財産です。

優れた看護学生の教育

長谷川 恵美（草津ハートセンター）

今回の研修で最も印象的であったのが、ポートランド大学看護学部ラーニングリソースセンターにおける看護学生の教育でした。シミュレーションラボストリー内では、学生を観察できるマジックミラーを備えた観察制御室やビデオが設備され、学生のとった行動を確認し、課題をみつけることで的確なフィジカルアセスメントが行える教育となっていました。

アメリカの看護師は、医療行為の一部を行うため、判断の根拠となるフィジカルアセスメントは医師同様のレベルが必要となり、それらができるためにも学生教育の中でのトレーニングの実施が徹底されていました。

学生の時からくり返し臨床に沿った教育を実践することで、実際に現場に立った時、的確な判断や行動が入職早期でも可能になるのではないかと思いました。また、経験を積んでからでも現場でトレーニングを行う必要も感じました。

学んだことを職場に生かしていく

藤澤 典子（松原徳洲会病院）

地元ポートランドで働いている日本人看護師の方からアメリカでの看護学校の仕組みや日本との違い、看護師の権限や病院のサポート体制などのお話を聞きました。

病院見学では看護師たちの自信に満ちた対応と自由な服装・装飾品や各診療科にセラピストやボランティアなどのサポート体制が整っていました。マグネットホスピタル認可の病院では、患者様・看護師の満足度も上げ活性化するための手立てがとられていました。看護職の満足度を高めることで看護の回復率に影響するだけではなく、患者様が満足することで医師や他の職種も満足が高まりその波及効果は大きいと言われています。

シミュレーションセンターでの本番同然の研修は、現

場に出た時のアセスメント能力や行動力を養い、病院での希望を聞いてシミュレーション研修を行ったりと現場にも本人にも良いシステムがあると思いました。

アメリカの研修を終え、日本の看護師のスキルの問題や病院としての体制、バックアップの問題などを考えさせられました。スタッフを生き生き働かせることで患者様への質の向上につながっていることを実感することができました。

看護職が果たすべき役割を学ぶ

光野 清美（鎌ケ谷総合病院）

今回の研修を通して、文献を読んだだけでは実感できなかった、実際のアメリカのヘルスケアに触れて、まさに体験・体感することができました。

緊急コールやコミュニケーションツールや薬剤管理システム、ロボットシミュレーションセンターなど、医療機器の最新のハイテク・システムに驚きました。また、その反面、大学附属の小児病院の朝のカンファレンスを見学した際には、複数の部署の多職種のリーダーが集まりその日の部署の問題に対して、各部署で共有し、PCの画面上だけでなく顔と顔を合わせたコミュニケーションを大切にしていました。それは、日本に比べ、急性期病院の平均在院日数が4日余りで重症度の高い患者に看護ケアを提供するためには、多職種間の連携によるチーム医療が重要視され、その調整を図ることが看護師にとって重要な役割であるからです。

今後の日本の医療においても、ますますの高度化と在院日数の短縮化が迫っています。日本の私たち看護職も、より良いチーム医療を提供するために、看護職が果たすべき役割を学ぶ必要があるということを実感しました。

尊厳死について考える

依田 かおり（鹿児島赤十字病院）

様々なプログラムの中でも、特に印象に残っているのは、「尊厳死」に関する講義である。私の中で、この制度はアメリカならではのYES or NOの意思表示の現れの典型ともいえるものだと思っていたが、実際に話を聞くと、個人、家族、友人、それぞれに様々な葛藤を抱き、ぶつかり、または共感し成り立つものであることに驚きを感じ、本人の意思決定から実施に至るまでのプロセスは並々ならぬパワーがいると思った。

忘れられないのが「孫に（死）というものは怖くないものだと教えるのは私の役目よ」と言って、この制度を利用し、家族に見守られて息を引き取った人がいたという話である。賛否両論のある制度ではあるが、この話を聞いた時は、その光景がリアルに思い浮かび、ご本人の目的が確実に達成されたのだろうと確信できた。

今回受けた刺激を糧にして、今後の自分の人生を豊かにしていく努力を惜しむことなく、邁進していきたいと改めて強く思った。

第16回
医学留学
セミナー

Where To Go? 留学はどこへ？

日時：2015年10月3日（土）12:30〜18:00
場所：順天堂大学本郷・お茶の水キャンパス
10号館1階105号室

主催：公益財団法人日米医学医療交流財団
共催：順天堂大学
後援：文部科学省、厚生労働省、（公社）日本医師会、
（公社）日本看護協会、（公社）日本薬剤師会

コーディネーター▶▶▶
稲葉　博隆（JANAMEF fellow／順天堂大学浦安病院心臓血管外科学教授）
小池　　薫（JANAMEF理事／京都大学大学院医学研究科初期診療・救急医学教授）

2015年10月3日（土）、医学留学セミナー《Where to Go? 留学はどこへ？》が順天堂大学本郷・お茶の水キャンパスで開催され、90名（うち医学生57名、研修医15名、医師10名、その他8名）の受講生が参加しました。

順天堂大学木南英紀学長と日米医学医療交流財団清水一功会長の開会のご挨拶の後、〈第1部〉のセッションに入りました。まず、（株）シェーンコーポレーション・カプラン御茶ノ水センター、メディカル・カウンセラー・平間健治氏には「USMLE 試験対策の現状」として、USMLEの試験内容を具体的に、かつ基礎の段階から分かりやすくお話しいただきました。ついで順天堂大学医学教育研究室の建部一夫膠原病内科准教授に、順天堂大学における現在の取組みやUSMLE対策についてお聞かせいただきました。第1部最後の「USMLEの攻略法〜最近の合格者の体験談」では、順天堂大学呼吸器内科西野宏一先生からはStep1、2CKの受験に際しての注意点並びに効率的な受験対策法を、また同呼吸器内科安藤克利先生からは2度のStep 2CS受験経験を踏まえ、対策の反省点と効率的なStep 2CS対策法をそれぞれ伝授いただきました。

休憩をはさんで、〈第2部〉のセッションに移りました。第2部は3人の講師、東京女子医科大学麻酔科・土井健司先生、順天堂大学心臓血管外科・丹原圭一教授、杏林大学心臓血管外科・窪田博主任教授に「マレーシア」「オーストラリア」「フランス」留学の体験を語っていただきました。心臓麻酔のように日本で十分な症例数が経験できない分野ではいかにマレーシアへの留学が有意義で魅力的であるか、オーストラリア留学で得られた成果とは何か、あるいは、最近のフランス留学事情など、どれも興味深い話ばかりでした。お三方のお話を通して、どのような心構えで留学をすれば、大きな成果が得られるかを知ることができました。

終わりにあたり、順天堂大学新井一医学部長と財団髙瀬義昌専務理事による閉会の辞があり、セミナーは盛会のうちに終了しました。セミナー終了後に行った受講生へのアンケートでは、「非常に有意義」と「有意義」の合計が95％となり、セミナー参加者の満足度の高さが裏付けられました。

最後になりましたが、コーディネーターの大役をお引き受けいただき、セミナーの企画から会場の手配まで、何から何までお世話くださいました順天堂大学浦安病院心臓血管外科学・稲葉博隆教授をはじめ、順天堂大学の皆様に心より感謝申し上げます。（小池）

プログラム

第1部　米国への留学：USMLEに合格しよう!! Let's beat the USMLE!!

【司会】堀江　重郎（順天堂大学大学院医学研究科泌尿器外科学教授）
伴　信太郎（JANAMEF理事長／名古屋大学大学院総合診療医学講座教授）

●USMLE試験対策の現状
【講師】平間　健治（株式会社シェーンコーポレーション・カプラン御茶ノ水センター、メディカル・カウンセラー）

●順天堂国際医学教育塾〜順天堂大学のUSMLE対策
【講師】建部　一夫（順天堂大学医学部医学教育研究室・膠原病内科准教授）

●USMLEの攻略法〜最近の合格者の体験談
【講師】西野　宏一（順天堂大学医学部呼吸器内科）
安藤　克利（順天堂大学医学部呼吸器内科）

―― パネルディスカッション ――

第2部　米国以外への地域への留学

【司会】稲葉　博隆（JANAMEF fellow ／順天堂大学浦安病院心臓血管外科学教授）
野村　　実（JANAMEF理事／東京女子医科大学医学部麻酔科学教室教授）

●マレーシアへの留学
【講師】土井　健司（東京女子医科大学医学部麻酔科学教室）

●オーストラリアへの留学―メルボルン、ホバート
【講師】丹原　圭一（順天堂大学医学部心臓血管外科学講座教授）

●フランスへの留学
【講師】窪田　　博（杏林大学医学部心臓血管外科学教室主任教授）

―― パネルディスカッション ――

2015年医学留学セミナー アンケート集計結果

90名中61名回収（回収率68%）

USMLEに関する情報がしっかり得られたし、様々な国への留学の話が聞けてよかったという感想を多数いただきました。これらの感想・意見等は次回以降のセミナーに活かしていきたいと思います。

1. 役　　職

[1] 医師 15名（25%）　[2] 研修医 5名（8%）
[3] 医学生 39名（64%）（うち6年 8名、5年 10名、4年 7名、3年 7名、2年 4名、1年 1名、不明 2名）
[4] その他2名（3%）

2. 参加した意義

5	4	3	2	1
非常に有意義	有意義	普通	改善の余地あり	参加しない方がよかった
44名(72%)	14名(23%)	2名(3%)	1名(2%)	

3. 全体の感想

- 米国での実話に基づく経験談や米国以外での臨床留学の話など、先生方の生き様は将来のキャリア形成に役立てたいと思った
- 米国以外の留学も USMLE についてもバランスの取れたセミナーだった
- USMLE 受験を考えている自分にとって具体的なアドバイスがいただけたし、米国以外に留学することに興味をもつよい機会になった
- USMLE に関する情報をまとめて取得できる機会が他にほとんどない
- USMLE に関してここまでしっかり聞けると思っていなかった
- 2023 年問題の話など自分の聞きたいことをやっと聞けた
- USMLE や留学について具体的イメージが湧いた
- 海外留学に関してまとまった話を聞ける機会が他にない
- 様々な国への留学の話が聞けてよかった
- 実際に注意すべき点を具体的に示していただいた
- インターネットでは得られない Step 2CS の情報が得られてよかった
- 仕事とどう両立してやったかなどが実際参考になってよかった
- もやもやしていた輪郭が明確になった
- 豪州への留学を予定しているため参考になった
- モチベーションが上がった
- 自分の知らない世界を知ることができた

4. 今後の海外留学の希望

[1] 有無
①あり　59名（96%）　②なし　1名（2%）　③不明　1名（2%）

[2] 目的（複数回答）
①臨床研修　39名（38%）　②臨床実習　21名（20%）　③臨床研究　14名（14%）
④基礎研究　12名（12%）　⑤語学　9名（9%）　⑥大学院　7名（7%）

5. 留学に際し困ること（複数回答）

[1] 言葉　11名（27%）　[2] 経済面　8名（20%）　[3] 外国医師免許の取得　8名（20%）
[4] 留学先　6名（15%）　[5] 家庭との両立　2名（5%）　[6] ビザ　2名（5%）
[7] 帰国後のキャリア　1名（2%）　[8] 情報　1名（2%）　[9] 日本での勤務が求められる　1名（2%）
[10] 必要書類　1名（2%）

6. 今後取り上げてほしいテーマ、内容

- 留学先の探し方、マッチング対策
- ヨーロッパでの留学
- 米国でのphD取得に関する話
- MPH留学の話
- 米国留学を実現させるために必要な具体的な準備の進め方
- 米国でのマッチングの現実、ビザの問題など実際問題について
- USMLEの日本人の得点分布、具体的得点など
- USMLE Step2CSの勉強法
- ECFMGを取得後、実際にレジデントで米国に行った先生方の体験談（診療科ごとの比較も知りたい）
- 研究留学からフェローまたはレジデントになれた事例
- 臨床留学LORの取り方
- フェロープログラムの説明
- 新専門医制度に基づく臨床留学の変化
- 米国の医療の現状
- 現地の医師からの話
- 多様な診療科分野での留学の話（脳外科、遺伝分野など）

7. その他意見等

- 配付資料が非常に充実した内容で見やすかった。カラーであればさらによかった
- 非常に有意義で、興味深い内容だった
- 内容の濃い、貴重なセミナーだった
- 東京に来た甲斐があった。とても勉強になった

JANAMEF シンポジウム

世界に通用する 医療の質と患者安全のために

日時：2015年8月1日（土）13:30〜17:30
場所：TKPガーデンシティ PREMIUM神保町

主催：公益財団法人日米医学医療交流財団
後援：厚生労働省、（公社）日本医師会、
（公社）日本看護協会、（公社）日本薬剤師会

コーディネーター▶▶▶
髙瀬　義昌
（JANAMEF専務理事／医療法人社団至高会たかせクリニック理事長）

2015年8月1日（土）、JANAMEFシンポジウム『世界に通用する医療の質と患者安全のために』がTKPガーデンシティ PREMIUM神保町で開催され、107名の受講者が参加しました。

日本の病院に本当に安心して任せられるのでしょうか？

このような不安が現実となるような出来事が最近多くマスコミで報道されています。特定機能病院の取り消しや学会認定施設の取り消しなどが相次ぎ、まさに日本の病院、それも一流と言われていた病院の信頼がゆらいでいるといっても過言ではありません。最先端の医療技術は超一流でも、医療の質や安全を担保するシステムやプロセスは一流なのでしょうか？

今回のシンポジウムでは、日本で国際病院機能評価にあたるJCI（Joint Commission International）認証を受けた施設の代表者・担当者等の講師5名（小松本 悟、小山 勇、佐野元子、髙井今日子及び山本貴道の各氏）に、JCI受審の経験等についてそれぞれご講演をいただき、

その後のパネルディスカッションでは、落合慈之・NTT東日本関東病院名誉院長と熊崎博司・相澤病院JCI室長をモデレータに、講師5名をパネリストに、JCI受審を巡る活発な議論が展開されました。その後、参加者とモデレータ・パネリストとの間で質疑応答があり、モデレータ・講師の先生方から経験を踏まえた丁寧なご回答をいただきました。

JCIの受審を考えている施設のみでなく、医療の質・患者安全の向上に関心のある医療関係者にとって、日本の病院が世界で評価されるような質の高い安全な医療を実践するには今後どのような対策を講じたらよいかについて考える絶好の機会となりました。

シンポジウム終了後に行った参加者へのアンケート調査結果では、「非常によかった」と「よかった」の合計が約9割となり、シンポジウム参加者の満足度の高さが裏付けられました。（髙瀬）

プログラム

●挨拶
【開会挨拶】**清水　一功**（JANAMEF会長）
【来賓挨拶】**土生　栄二**（厚生労働省医政局総務課長）
【コーディネーター挨拶】
髙瀬　義昌（JANAMEF専務理事）

●特定機能病院の事案から学ぶ
【講師】**町田　宗仁**（厚生労働省医政局総務課保健医療技術調整官）

●足利赤十字病院がJCI認証を取得して
ーなぜ受審したのか、何を学んだのかー
【講師】**小松本　悟**（足利赤十字病院院長）

●大学病院におけるJCI受審の経験
ー組織改革とリーダーシップの重要性ー
【講師】**小山　勇**（埼玉医科大学国際医療センター病院長／JANAMEF理事）

●亀田総合病院におけるJCIの取組み〜JCIは黒船か
【講師】**佐野　元子**（亀田総合病院企画部経営企画室室長補佐）

●部門横断的な質改善活動
【講師】**髙井今日子**（聖路加国際病院副看護部長・QIセンター副センター長）

●米国での臨床と当院でのJCI導入経験
【講師】**山本　貴道**（聖隷浜松病院副院長）

●パネルディスカッション
【モデレータ】**落合　慈之**（NTT東日本関東病院名誉院長）
熊崎　博司（相澤病院JCI室長）
【パネリスト（登壇順）】
小松本　悟、小山　勇、佐野　元子、髙井今日子、山本　貴道

●Q&A（質疑応答）
モデレータとパネリストの皆様

●閉会挨拶
伴　信太郎（JANAMEF理事長）

シンポジウム「世界に通用する医療の質と患者安全のために」アンケート集計結果

「パネリストの選択がよく、密度の濃い討論だった」「パネルディスカッションがとてもよかった（本質をついていた）」など参加者に満足いただける内容となりました。今後のテーマについても様々なご意見をうかがうことができました。

107名中33名回収（回収率31%）

1. 参加した意義

5	4	3	2	1
非常によかった 21名(64%)	よかった 8名(24%)	普通 4名(12%)	よくなかった	非常に悪かった

2. 全体の感想

- JCI取得に向けた取組が、病院組織、患者にとってメリットがあることを伝えることができる
- リーダーシップの大切さがよく認識できた
- ガバナンスの重要性が理解できた
- 病院を管理する方々がどのような点に重点をおいているのかが分かった
- JCI受審機関のいろいろな話が聞けて有意義だった
- JCIを直近で取得された病院や2回目、3回目の病院とそれぞれ興味深い内容の話が聞けた
- 複数の医療機関の運用について話が聞けてよかった
- パネリストの選択がよく、密度の濃い討論だった
- パネルディスカッションがとてもよかった
- 1演題20分間と集中するのによい時間だったし、パネルディスカッションも本質をついていた
- よくも悪くも黒船は来るが、積極的に対応すれば、成果があることが理解できた
- 人はミスを犯すものという前提でのシステム構築、にもかかわらずスタッフの自主的な動き ⇒文化が作られる
- 今後の医療の重点（医療安全）の現状を知ることができた
- ブッチャケ話も聞けてよかった

3. 今後取り上げてほしいテーマ、内容

- リスクマネジメント
- 医療の質の向上への取組
- 2025年問題
- 国際化取組事例
- 医療に関わる患者安全の視点を知りたい
- 施設基準、診療報酬との連動、違い
- 再生医療
- 「先進国での最新医療（技術）」と「新興国での真のニーズ」とのバランス
- グローバル医療人の育成
- 参加型臨床実習への取組を含めた医療教育改革
- 医学教育

4. その他意見等

- 素晴らしい会に参加させていただき感謝
- 医療の質についての考え方が分かった
- 2日間コース等あれば時間を有効に使えるのではないか

JANAMEF
セミナー

日本の医療の未来
～国際化の流れの中で～

日時：2015年5月31日（日）13:30～17:00
場所：東京医科大学病院第一研究・教育棟3F第一講堂
主催：公益財団法人日米医学医療交流財団

コーディネーター▶▶▶
髙瀬　義昌（JANAMEF専務理事／医療法人社団至高会たかせクリニック理事長）

2015年5月31日（日）、JANAMEFセミナー『日本の医療の未来～国際化の流れの中で～』が東京医科大学病院で開催され、129名の受講者が参加しました。

現下の日本を見てみますと、人口に占める高齢者の割合が増加する高齢化と、出生率の低下により若年者人口が減少する少子化が同時に進行する少子高齢化社会となっています。高齢化の進展を背景として、社会保障給付は今後も急激な増加が見込まれます。団塊の世代が75歳以上となる2025年に向かって、特に医療・介護分野の給付は、GDPの伸びを大きく上回って増加していきます。団塊の世代が75歳以上となる前の2020年初めまでに、受益と負担の均衡が取れた社会保障制度を構築していく必要があります。

そこで、今回のセミナーでは、古川俊治先生からは「日本の医療の未来」をテーマに、また、徳田安春先生からは「過剰診療からhigh value careへ！」と題しましてお話をいただき、参加者との間で活発な質疑応答が交わされました。医療の発展と財政再建の両立といった視点も含め、日本の医療の未来について考える機会を提供するものとなりました。

セミナー終了後に行った参加者へのアンケート調査結果では、「非常によかった」と「よかった」の合計が9割を超え、高い評価をいただきました。（髙瀬）

アンケートに寄せられた感想

- これからの医療の向かうべき方向について考えることができた
- 日本医療の今後の課題を的確に示された
- 日本の医療の抱える問題点が整理できた
- 医療を取り巻く環境及び方向性について勉強ができた
- 貴重な情報、最新の情報、ここでしか聞けなかった情報があった
- 国の医療戦略の方向性とEBMからhigh value careへの動きを認識できた

などなど。

講師紹介

古川　俊治　参議院議員。医師、弁護士、博士（医学）。慶應義塾大学法科大学院・医学部外科教授（兼担）。
埼玉県さいたま市（岩槻区）出身。慶應義塾大学医学部（1987年）・文学部（93年）・法学部（96年）卒業。2005年オックスフォード大学大学院修了（MBA）。現在、厚生労働部会部会長、科学技術イノベーション戦略調査会事務局長、生殖補助医療に関するプロジェクトチーム座長。

徳田　安春　総合診療医。独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）本部総合診療顧問。
沖縄県出身。1988年琉球大学医学部卒業。沖縄県立中部病院、聖路加国際病院、筑波大学水戸地域医療教育センター・水戸協同病院、JCHO総合診療教育チームリーダーを経て、2014年12月より現職。ハーバード大学院公衆衛生修士課程修了。General Medicine誌編集委員長。塩崎厚生労働大臣「保健医療2035」メンバー。

JANAMEF 支援業務 実施報告

茨城県指導医団 国外派遣事業支援業務実施報告

財団では、医学医療の国際交流を支援してきたこれまでの実績をもとに、地方公共団体に対する支援業務として、昨年度に引き続き茨城県指導医団国外派遣事業支援業務を実施しました。本事業は、茨城県内の指導医の指導技術の向上を図るため、意欲ある若手指導医の一団（5名）を米国（ハワイ）に派遣し、当地の医療現場や医療施設などで、先進的な教育方法を学ぶものです。財団では、派遣プログラムの作成からその実施まで一貫した業務を支援しました。その概要を以下のとおり報告します。

研修期間：2015年11月11日（水）～20日（金）（10日間）
研修地：米国ハワイ州ホノルル市
主催：茨城県保健福祉部 医療対策課医師確保対策室
企画・実施支援：公益財団法人 日米医学医療交流財団

支援事業の概要

●事業の目的

県内の若手指導医の更なる指導能力の向上を図るため、意欲ある若手指導医団を結成し、世界標準の先進的な指導・教育に取り組んでいる米国（ハワイ）に派遣することで、スキルの向上と県内研修体制の強化を推進し、「若手医師教育研修立県」としてのイメージの向上及び医師の県内定着を目的とする。

●支援業務の内容

① 指導医団国外派遣プログラムの作成
② 出発前の準備（オリエンテーションを含む）
③ 派遣先でのプログラムの実施
④ 必要物品並びに手続きの手配及び支払い

●支援期間

平成27年4月23日～平成28年1月31日

●主な研修内容

① 外来・救急等でのレジデントへの指導方法
② ベッドサイドにおけるレジデントへの指導方法
③ カンファレンスにおける指導方法
④ 医師のプロフェッショナリズム（マナー・接遇・倫理）

プログラムの主な内容

- 聖ルカ・クリニック研修
- ワイキキ緊急医療クリニック研修
- クイーンズメディカルセンター：
  モーニングレポート、レジデント病棟回診、ヌーンカンファレンス、グランドラウンドレクチャー
- カピオラニコミュニティーカレッジ（KCC）：
  Health Science Programs Tour, Hospitality Workshop, Gerontology and Active-Aging, WIC Program, KKV Family Comprehensive Services Visit, Castle Medical Center Services Visit
- ハワイ大学・ジョンA.バーンズ医学部SimTikiシミュレーションセンター：シミュレーション教育
- レジデント（JANAMEF Fellow）訪問
- 在ホノルル日本国総領事館訪問

クイーンズメディカルセンターにて

Sim Tiki シミュレーションセンターにて

事務局だより Activities

育てようJANAMEFネットワークを
～第4回JANAMEF賛助会員交流会報告と次回のご案内～

日米医学医療交流財団では、当財団を支えていただいている会員の皆様の交流の場を開き、会員の親睦を深めるとともに、当財団関係者との意見交換・情報交流を図ることを目的に定期的に交流会を催しております。

2015年10月24日（土）開催の「第4回JANAMEF賛助会員交流会」には、約100名の方々が参加くださいました。今回は、当財団編『心臓外科診療にみる医学留学へのパスポート』の発刊を記念して、執筆の先生方にご講演いただきました。ご参加の皆様全員に新刊をお持ち帰りいただきました。参加者からは、心臓外科領域の多様な臨床留学先での熱のこもった経験談が聞けてよかったというお声を多数いただきました。

歓談では、会員の皆様、ご登壇の先生方、JANAMEFフェローと当財団関係者との交流の輪が広がりました。次回の交流会は下記のとおり開催します。皆様のご参加をお待ちしております。

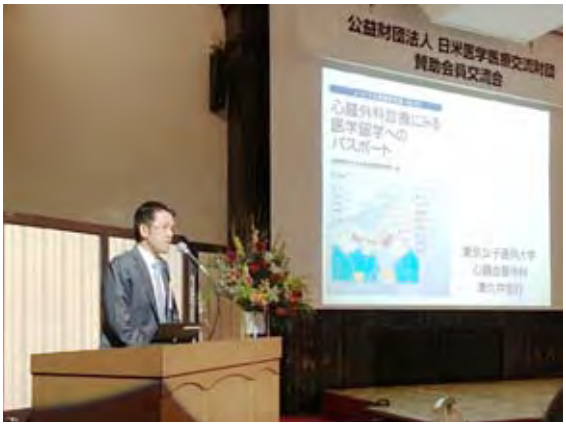
賛助会員交流会式次第

◆来賓挨拶

財務省事務次官	田中 一穂
文部科学省高等教育局長	常盤 豊
厚生労働省医政局長	神田 裕二

◆パスポート執筆者“記念”講演

東京女子医科大学心臓血管外科講師	津久井 宏行
東京大学医学部附属病院心臓外科准教授	平田 康隆
北里大学医学部心臓血管外科准教授	北村 律
倉敷中央病院心臓病センター心臓血管外科部長	恒吉 裕史



第5回JANAMEF賛助会員交流会のご案内

日　時：2016年3月19日（土）18：30～（受付 18:00～）
会　場：学士会館2階210号室　東京都千代田区神田錦町3-28　TEL：03-3292-5936
参加費：1万円（当日受付で納付ください）
お問い合わせ先：公益財団法人日米医学医療交流財団事務局
E-mail：info@janamef.jp　TEL：03-6801-9777　FAX：03-6801-9778

編集後記

文部科学省の公募事業に応募しておりました企画提案が採択されました。テーマは「国内外の医療系学部等におけるシミュレーション教育・研修に関する調査研究」です。財団では、昨年12月にプロジェクト・チーム（PT）を立ち上げ、国からの調査研究委託事業に着手しました。平成27～28年度の2箇年事業ですが、今年度はシミュレーション教育に関する国内外の先進的取組事例の調査を実施し、来年度にかけて「今後のシミュレーション教育・研修のあり方について」提言をまとめていく予定です。財団の強みを活かし、政策課題に対応した事業にも取り組んでいく所存です。（事務局長　坂上正人）